

# 日本医療機能評価機構

日本医療機能評価機構は、国民の健康と福祉の向上に寄与することを目的とし、中立的・科学的な第三者機関として医療の質の向上と信頼できる医療の確保に関する事業を行う公益財団法人です。

## 認定病院の 改善事例紹介 シリーズ

Improve

Vol.5  
リハビリ  
テーション

### 紹介事例

一般社団法人 鶴岡地区医師会  
鶴岡市立 湯田川温泉リハビリテーション病院  
—「患者とともにある医療」をチームで推進する—

医療を見つめる第三者の目。  
それが病院機能評価です。



公益財団法人 日本医療機能評価機構  
Japan Council for Quality Health Care

<http://www.jcqhc.or.jp/>



病院機能評価は、患者さんが安心して安全な医療を受けることができるように「病院の改善」を支援する仕組みです。サーベイヤーと呼ばれる専門調査者が病院を訪問し、病院の取り組みを評価します。病院外部の第三者機関による評価を上手く活用することで、これまで院内では気付くことができなかった課題や強みなどを明らかにすることができます。

評価の結果、一定の水準を満たしていれば「認定病院」となります。評価を受けることで明らかになった課題を改善し、認定を更新していくことで、継続的な質改善活動を行うことができます。

評価は、病院の特性に応じた6つの機能ごとに行われます。



第5号では『リハビリテーション』版の病院機能評価を活用して改善に取り組んだ事例を紹介します。

# 「患者とともにある医療」をチームで推進する

## 鶴岡市立 湯田川温泉リハビリテーション病院の場合…

回復期の療養から在宅を経て最期まで「患者とともにある医療」のために、院内外を問わず様々な形で多職種と連携するー 湯田川温泉リハビリテーション病院の事例を紹介します。



急性期病院に入院中の患者さんのなかには、リハビリテーション病院へ転院が決まると「急性期病院から見捨てられるのではないか」と思う方がいます。その不安を取り除くためにも、リハビリテーション病院は急性期病院以上に、医療の質向上と患者に寄り添う医療に努める必要があると考えます。3年前、急性期病院から、当院の院長となった自分にとっても、リハビリテーション病院として病院機能評価の認定を取得できたことは大きな自信になりました。(武田院長)

### 専門性を高めたチーム医療

#### ～転倒・転落防止～

同院は各職種がより専門性を高めるため、研究や認定・専門資格取得を奨励してきた。職能の向上が現場に顕著な効果をもたらした一例が、転倒・転落防止の取り組みである。

3年前、着任当時の武田院長は院内インシデント・アクシデントの7割を転倒・転落が占めている点に着目して、転倒・転落予防を喫緊の課題として提案した。「高齢者の入院患者が多いから有効な対策がない」と、どこかで諦めていた院内であったが、多職種が協働して転倒・転落防止に向けた活動を実施することとなった。

最初は、看護師だけで原因を分析し対策を検討していたが、理学療法士、作業療法士も参加することで、多くの改善策が実現した。

#### 【転倒・転落のための様々な工夫】



「自宅の生活に合わせたベッド環境を設定し、統一して対応しています。」(三浦看護師長)

多職種が協働してヒヤリ・ハット分析や研究会参加、文献からの学びを進め、様々な改善策が実施された結果、転倒・転落率は7.5%から4.8%へ減少した(p<0.01)(転倒数/入院患者延べ数をコントロール群と15か月で比較。調査期間平成24年4月～平成26年9月)



「転倒・転落対策チームを結成したことで、多職種との意見交換が増え、転倒・転落率の減少につなげることができました。転倒・転落予防の取り組みを病棟だけでなく院内で標準化することが今後の目標です。」(本間看護師)

### 院外資源を活用したチーム医療

#### ～口腔ケアの充実～

「当院入院中に口腔内環境の最適化を図り、高齢であっても健康で生き生きとした生活が送れるように」という歯科医師会とのディスカッションがきっかけとなり、口腔ケアの取り組みが始まった。歯科医師と歯科衛生士の指導により多職種が知識を得て、患者向けの研修会やアセスメントシートの作成、定期的に口腔状態をチェックする口腔ケアラウンドの実施などを通し、口腔ケアの重要性とスキルの浸透に努めている。

「口腔ケアラウンドは、軌道に乗るまでが大変でしたが、曜日と時間を決め、スタッフの意識を高めることで、徐々に浸透しました。」(齋藤主任看護師)



【口腔アセスメントシートは多職種が使えるよう、「使い続けられる」を意識して作成】

【口腔アセスメントシート】		氏名: ( )	記入日 年 月 日
主病名:		主病名:	記入者
口腔ケア介入の必要性	<input type="checkbox"/> 有	<input type="checkbox"/> 無	
嚥下の有無	<input type="checkbox"/> 有	<input type="checkbox"/> 無	
意識の有無	<input type="checkbox"/> 有	<input type="checkbox"/> 無	
食事ができるか	<input type="checkbox"/> 有	<input type="checkbox"/> 無	
観察項目	観察基準		
口腔内乾燥	あり:1点 なし:0点		
出血・腫脹	あり:1点 なし:0点		
歯石・プラーク	あり:1点 なし:0点		
分泌物貯蓄	あり:1点 なし:0点		
苦味	あり:1点 なし:0点		
口臭	あり:1点 なし:0点		
合計点			
ケア方法	口腔内環境	所患アセス	評価サイン
・セルフケアでブラッシング後、仕上げ磨き ・コンクール液で口腔清拭 ・保潔期の遵守 ・舌のブラッシング ・その他		右  左	

軽視されがちな口腔ケアは、誤嚥性肺炎の予防や治療効果の向上をはじめ、患者ADL・QOL向上に直結する課題である。ケアの効果が明らかに出て良好な経過をたどる患者を目の当たりにすることで、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士など、関係する多職種に「自分が」関わろうという意識が定着しつつあるという。

「今後は摂食嚥下認定資格がある言語聴覚士との連携を強化し、ケアの手順も見直してさらに良いものにしたい」と話す齋藤主任看護師。さらなる改善に向けた意欲が満ちている。

### 患者の架け橋となるチーム医療

#### ～医療・介護連携～

同院のある鶴岡地区は、IT活用による医療情報の共有環境が整備されている。脳卒中などの地域連携パスもIT化され、急性期から回復期へ、そして在宅復帰、最期を迎えるまでの患者情報を医療・介護に係る各職種が共有できるようになっている。

2014年、同院は病院機能評価の受審をきっかけに、院内で別々に機能していた前方連携と後方連携の統一を目的として、地域医療連携室を発足させた。

「地域医療連携室の開設によって、患者の症状変化や入院予定の把握・調整がスムーズになった」と話すのは齋藤看護課長。「同じ部屋に多職種が揃っているのも、独居や認知症といった様々な問題の対応について、すぐに話し合いができます」。情報共有がタイムリーになることで、これまでそれほど紹介数が多くなかった医療機関からの転院例も増え、患者数増加にもつながっているという。



「転院された患者さんや、在宅に戻られた患者さんが、数年後とびきりの笑顔で訪ねてくれると本当に嬉しいです。患者さんの人生は、リハビリテーション病棟だけで完結しているのではない、私たちは患者さんにとって重要な橋渡しをしているんだと、重い責任を感じます。」(齋藤看護課長兼地域医療連携室係長)



### 患者に寄り添うチーム医療

#### ～退院後訪問～

同院では、様々な形でチーム医療を進めることにより、患者への信頼を高めてきた。その信頼をさらに深める取り組みが、退院後の患者を訪問して経過確認をする「退院後訪問」の実践である。



「退院後訪問では、退院前に多職種で検討した住宅改修の有効性などを確認します。経時的なフォローにより、状態が悪化して再入院となった場合でもスムーズな対応ができます。」(中澤リハビリテーション課係長)

退院後訪問を行うことにより、退院後の患者がどのように生活しているか、環境を見て、患者や家族の話聞きながら確認することができるようになった。また、退院前にスタッフが考えた患者へのサービスが、どのように活かされているか、これまでなかなか振り返る機会がなかったが、退院後訪問を通して今後のより良い支援を考えることが出来るようになったという。

「急性期病院にいた頃は、患者さんの疾患をみていました。病気が治ったら退院というイメージでした。」

現在は、生活プラス病気プラス家庭をみるという視点に変わりました。難しいですが、やりがいを感じています。」(三浦看護師長)



退院後に適切な患者支援を行うには、家族や地域の医療・介護施設との連携が重要となる。その連携のカギとなるのが職員一人ひとりの「患者とともにある医療」を行いたいという想いである。

現在は病棟ごとに月1例程度の訪問だが、今後は医師会の訪問看護・リハビリテーションに担当のリハビリテーション職員が同行することで、退院後訪問の件数を増やしていくことを目標としている。

# 病院機能評価受審の効果

「選ばれ続ける病院」であるために…チーム医療の推進で医療の質を向上させ、職員一人ひとりに自信と誇り、そしてさらなる改善への目標を与えてくれたのが「病院機能評価」でした。

同院がある地域の回復期リハビリテーション病床数は、全国平均の2倍以上である。また、同様に充実している急性期病床も一部は今後、回復期リハビリテーション病床へ機能転換が予想されている。

「地域における当院ならではの役割を確立し、患者と職員双方に選ばれ続けていく必要がある」と武田院長は話す。

「選ばれ続ける病院」であるために、現状に満足することなく、継続的に病院をレベルアップする必要があると同院は考える。そのツールとして取り入れたのが病院機能評価であった。

## 受審を通して得た職員の自信と誇り

この考えのもと同院は、2005年、2009年、2014年と病院機能評価を継続して受審してきた。「受審

にあたっては、通常業務外の準備・作業が生じる。正直大変だった。しかし、受審を通じた改善こそが何より患者さんのためになる、と職員一人ひとりが理解しているから頑張れた」と大井事務部長は話す。

3回の受審を通して、同院は着実に医療の質を向上させてきた。その成果は、チーム医療の推進という形で同院に浸透している。また、院内だけでなく、歯科医師会や介護施設などの他施設と協働することでのチーム医療も取り組みを進めている。

病院機能評価により、「実施してきた取り組み」が適正に評価されることは、職員に自信を与えている。その自信が誇りとなり、さらなる改善に向かうモチベーションとなっている。

## さらなるチーム医療の推進

改善は同時に、新しいステージへの第一歩となる。今回の受審により、同院は今後、地域とのさらなる連携強化を目標に掲げる。切れ目ない患者支援のため、退院後を見据えた患者参画型カンファレンスの強化や、訪問看護・リハビリテーションなどの試みが始まる予定である。

また、転倒・転落防止や口腔ケアの充実については、現在の活動を院内で標準化することを目標に、積極的に取り組んでいる。



## 「選ばれ続ける病院」であるために

同院では、課題の解決のために、また、より良い医療を提供するために、様々な場面で多職種・多施設と連携

を図っている。連携により課題を共有し、解決のための知恵を出し合い、また新たな気づきを得て改善活動につなげてきた。

チーム医療を推進しやすい土壌として、同院には「アイデアを生み共有しやすい」「改善策をすぐに実行しやすい」という文化がある。そのなかに病院機能評価が加わることで、継続的に医療の質改善を实践する基礎がつけられてきた。

「選ばれ続ける病院」であるために、「患者とともにある医療」をチームで推進する取り組みは続いている。

## 編集後記

「課題があれば、すぐに改善策を考え、実行する」  
取材のなかで、私が職員の皆さんに対して一番強く感じた印象です。  
その原動力となるのは、職員ひとりひとりの心に、常に「患者のため」という一番の目的があるからだ  
と思います。  
仕事をしているとき、忙しいからと課題を後回しにすることや、妥協することは簡単です。私の経験で  
すが、そういう時は大体本当の目的を見失っていて、成果も出せずに後悔することがほとんどです。  
一番の目的をいつも忘れずに、そして限りある時間を大切に、仕事をしようと感じた取材でした。  
(久米麻莉菜)

## 病院概要

平成27年11月1日現在

病院名	鶴岡市立 湯田川温泉リハビリテーション病院		
管理運営	一般社団法人 鶴岡地区医師会	院長	武田 憲夫
所在地	〒997-0752 山形県鶴岡市湯田川字中田35-10 TEL 0235-38-5151 / FAX 0235-38-5152		
開設	平成13年3月		
病床数	120床		
標榜科目	内科、脳神経外科、リハビリテーション科		

日本医療機能評価機構 認定病院の改善事例紹介シリーズ  
Vol.5 リハビリテーション

2016年1月発行

発行：公益財団法人 日本医療機能評価機構  
〒101-0061 東京都千代田区三崎町1丁目4番17号 東洋ビル  
TEL：03-5217-2320(代) / 03-5217-2326(評価事業推進部)  
http://www.jcqh.or.jp

